

## 第14回 群馬県少子化対策推進県民会議 概要

### 1. 日 時

平成30年7月25日(水) 15:30～17:10

### 2. 場 所

群馬県庁7階 審議会室

### 3. 出席者

委員 11名、代理委員 1名、事務局等9名 (計21名)

### 4. 会議内容

- (1) 会長・副会長選出
- (2) ぐんま子育て・若者サポートヴィジョン2016の取組状況について
- (3) 地域少子化対策重点推進交付金事業について
- (4) 群馬県次世代育成支援行動計画の次期計画の策定について
- (5) 少子化対策に関する県民意識調査について
- (6) 意見交換

### 5. あいさつ(中村こども未来部長)

県では少子化対策について全力で取り組んでいるが、目に見えた成果には結びついていない。平成29年の出生数は13,279人と、目標である出生数14,500人の維持が困難になっている。また、合計特殊出生率は対前年0.1ポイント減の1.47となり、全国平均よりは高いものの、依然として厳しい状況となっている。

国では、「骨太方針2018」に保育料等無償化を盛り込み、長時間労働是正等を目的とする働き方改革関連法案も成立し、仕事と子育ての両立が容易になることが期待されるが、県としては、今後の動向を注視しながら、県民の希望に添った対策を進めていきたい。

本会議は、第4期として新たなスタートを切るが、現行計画の評価の他、次の次世代育成支援行動計画策定のための重要な時期にあたる。少子化対策は、様々な問題を原因として一人ひとりのライフサイクルが止まってしまっている状況の一つずつ解きほぐしていく困難な作業ではあるが、子どもたちの未来を明るくするために、皆様のお力添えをいただきたい。

### 6. 委員自己紹介

## 7. 議事

### (1) 会長・副会長選出

会長に片野委員（社会福祉協議会）、副会長に佐藤委員（群馬大学大学院保健学研究科）を選出

#### ○片野会長あいさつ

本会議は大きなミッションを抱えているが、県行政に少しでも反映できるよう、各界委員の積極的な御発言をお願いしたい。

#### ○佐藤副会長あいさつ

本会議は各委員の様々な御意見を拝聴できる貴重な場であり、微力ながら会議運営に携わらせていただきたい。

### (2) ぐんま子育て・若者サポートヴィジョン 2016 の取組状況について

### (3) 地域少子化対策重点推進交付金事業について

資料 1、2 を事務局から説明後、質疑応答

質問・意見	回答等
<b>○片野会長（社会福祉協議会）</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 地域少子化対策重点推進交付金事業は、いつから行っているのか。国の補助率 10/10 は無くなったのか。</li><li>・ 30 年度事業は 29 年度と比較してどうか。</li></ul>	<b>○事務局（こども政策課）</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 平成 26 年度から事業を実施している。現在は補助率 10/10 のメニューは無い。</li><li>・ 29 年度に比べて 30 年度は事業を拡充して実施している。</li></ul>

### (4) 群馬県次世代育成支援行動計画の次期計画の策定について

### (5) 少子化対策に関する県民意識調査について

資料 3～5 を事務局から説明

### (6) 意見交換

議題(4) (5) 及び少子化対策全般について意見交換

意見
<b>○津久井委員（経営者協会）</b> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 若い世代に当事者意識が薄いことを強く心配している。子育てが終わった世代の方が、「少子化」を口にする機会が多い。現行計画に今の若い世代の意見がどれだけ反映されているのか。本気で少子化対策をするのであれば、当事者である子育て世代の日常会話の中に「結婚」「出産」「子育て」が出てくるような社会を実現することが理想。</li></ul>

**○吉田こども政策課長（事務局）**

- ・ 津久井委員の発言のとおり、若者世代は、直近の就職などに意識がとらわれている。県では、「若者による少子化対策リサーチ&アクション事業」として、大学生を中心とした若者達に、少子化に対する考えや、その考えを踏まえたアクションプランを提言してもらおう事業を行っており、若者の当事者意識が見えてくるのではないかと期待している。

**○清水委員（PTA連合会）**

- ・ 子どもを産んでも預ける場所がない。また、子どもを生みたいが仕事もしたいため、更なる出産を考えられない人もいる。企業には産育休を取りやすいように制度を考えてもらいたい。
- ・ 若い人に県に住んでもらわなければ少子化対策は進まない。多くの若者が県外に進学してしまっている。そういった若者に対するUターン就職支援を更に積極的に進めてもらいたい。

**○高草木委員（連合群馬）**

- ・ 連合群馬の調査でも「貧困の連鎖」が浮かび上がってきている。
- ・ 貧困家庭では、奨学金を借りている方も多く、夫婦それぞれ別々に未だに奨学金を返済している事例もあると聞いている。また、結婚、出産をためらう理由の一つは貧困。生活困窮家庭に非婚者が多く、どこかで「貧困の連鎖」を断ち切ることが、我々大人の責務だと考えている。

**○仲野委員（ぐんま地域活動連絡協議会）**

- ・ 周りには、30代、40代の子どもが結婚しないという家庭が多い。昔のように相手を紹介してくれる人も少ない。子ども自身も積極的に活動していない。親もあまり気にしていない様子。
- ・ 子どもが県外に進学する家庭も多く、学費や仕送りなど、親の負担も大きい。親が奨学金を返済しているケースもある。子どもは就職しても貯金がないため、結婚が考えられないなど、負の連鎖となっている。どこにメスを入れれば少子化が解決に向かうのか見えない状況。
- ・ Uターン就職を条件に返済を免除する奨学金制度を県が用意することはできないか。

#### ○下田委員（青少年育成推進会議）

- ・ 以前は、結婚して家を出なければ生活できない、居づらい、という状況があったが、今は、結婚しなくても生活ができ、居心地も悪くない。相手を紹介されても、結婚しようと思わない。
- ・ 子どもが育つとき、「どのように育ってもらいたいか」「どういう社会を創ってもらいたいか」という夢や理想についてイメージが湧くように、親世代が、言葉だけでなく、身をもって示す子育てをして来なかったのではないか。

#### ○矢嶋委員（看護協会）

- ・ 看護師として地域格差が大きいと感じている。保育所についても、吾妻地域では預ける時間が短く、変則勤務の看護職では、正規職から非正規職に移らなければならない。育児短時間勤務等の制度を使って正規職を継続しても収入は減ってしまう。
- ・ 県全体をまとめて分析・評価するだけでは、地域の課題解決・対策に繋がらない。地域の状況を踏まえた評価や調査が必要。
- ・ 少子高齢化は地域から始まっているが、財政上の問題もあり、子育て環境整備が進まないこともある。就職先がなければ、生計が立てられず、都市部へ若者が出て行ってしまう。
- ・ 子育て世代とその親との同居状況も知りたい。周りには親と同居している世帯は少ない。介護や自らの第二の人生のため、同居を望まない親も多い。

#### ○中村子ども未来部長

- ・ 地域格差は深刻であると認識している。「ぐんま子ども・子育て未来プラン」では、市町村ごとの計画を立て推進している。吾妻地区も当初と比べれば頑張っており、あと一息というところまで来ている。引き続き御示唆をいただきたい。

#### ○津久井委員（地域婦人団体連合会）

- ・ 婦人会では、約 200 人の世話人が男女の出会いを手がけ、県下で約 600 人の登録者があり、少しずつ浸透してきている。
- ・ 男女ともに若い世代において、結婚・出産年齢に対する認識が乏しい。諸外国のように、高校生等の若い時期から、結婚・出産年齢について知識を与える必要がある。
- ・ 相手を紹介してもお互いに忙しさを理由に結婚に向けたお付き合いが進んでいかない。働き方などの課題もある。
- ・ 保育所が増えることも大事であるが、小さいうちは子どもを抱きかかえながら育てるなど、女性が幼い子どもを育てる環境についても研究が必要。

○佐藤副会長（群馬大学大学院保健学研究科）

- ・ 大学卒業後に専門職に就くモチベーションはできているが、自分のキャリアパスの中での結婚、出産、子育てを理解していない学生が多い。本学科の学生に対して保健師による生殖に関する講義を行ったところ、キャリアとライフイベントについて考える役に立ったとの意見が多かった。
- ・ 若い世代が当事者意識を持つための仕掛けが大事。20代の若者を学生、社会人といった対象別に、それぞれにシャワーのように情報提供していくことが必要ではないか。大学生のチームがアクションプランを作るというユニークな取組についても、大学生から大学生に広がるように繰り返し情報を届けていくことで、当事者意識形成に繋がるのではないか。

○梅村委員（町村会）

- ・ 以前は、スキーなどが若い男女の出会いや結婚への媒体であったが、最近は若者の価値観や趣味が多様になり過ぎて、出会いの場が少なくなっている。若い男女の出会いの場を作ることも行政の役割ではないか。
- ・ また、若者の異性とのコミュニケーション力を鍛えることも行政の仕事の一つと考えている。

○春山委員（市長会）

- ・ 一人でいることが居心地良いという環境は、個を大事にする素晴らしいことではあるが、婚姻数の成果には繋がっていかない。今年度予定している調査を通じて、結婚しない、子どもを持たない若者の本音を引き出し、集中的に対策を講じていく必要がある。
- ・ 昔に比べて、恋愛と結婚の距離が遠ざかっている。仕事が忙しくても、スマートフォンなど、連絡を取りやすい環境にあるにも関わらず、問題が解決していない。一番難しいところだが、本当の原因を明らかにする必要がある。
- ・ 夫婦の出生児数は2.0に近い。子育て環境の充実を通じて、既に家族を持っている方への支援も重要と考える。

○千葉委員（群馬労働局）

- ・ 子どもを持ちたい方が、希望する数の子ども持つことができるよう、育児介護休業法や、男性の育児参画に係る法改正や施策について、周知を図ってきたい。
- ・ 児童虐待の事案など、大人社会の問題が子ども社会にも影響している面もあり、それらも念頭に議論した方がよい。

#### ○津久井委員（経営者協会）

- ・ 子ども達やこれから結婚する方達に一番影響を与えるのは親であり、時間はかかるが、繰り返し子どもに声かけをしていくしかないのではないか。
- ・ 桐生では年間約 2,000 人ずつ人口が減っており、高校卒業後、東京に出たら、約 17%しか帰ってこない。理由として、東京の方が収入が高く、暮らし安い  
ため、親が帰ってこいと言わないという調査結果もある。
- ・ この秋から、親御さんに向けて、桐生に帰ってきて就職するよという運動を展開する予定だが、就職後についても、桐生で結婚して桐生に住んでもらいたいと言いつけるよう行政とも連携して進めたいと感じた。

#### ○片野委員（社会福祉協議会）

- ・ 本日の意見を通じて、若者や子育て世代の当事者意識の薄さという課題が見えてきた。まずは足下から、親が覚悟を持って子どもたちに働きかけることが大事であり、ライフイベントを若いうちから自覚できるよう当事者意識の醸成を図る必要がある。
- ・ 併せて、家族形成支援、子育て支援、両立支援、それぞれの条件や環境を整えていくことが大切だと考える。
- ・ 事務局においては、本日の意見を踏まえ、次回の会議等への反映をお願いしたい。

#### 8. その他

「ぐんま子育て応援メッセージ大賞」及び次回開催予定について事務局から説明

#### 9. 閉会のあいさつ（中村こども未来部長）

- ・ 本日の議論のポイントとして、「若い人をいかに動かすか」「そのために大人や親がどう行動して、手本を示すか」ということが大切だと感じた。
- ・ 親世代は共働きで忙しいことを理由にして、子どもに近所づきあいなどのコミュニケーションの機会を与えてこなかったのではないか。子ども達にしつかりとした経験や体験を積ませてあげることが少子化対策に繋がる。
- ・ 本日の意見を踏まえて、次期計画の策定準備や各施策の検討を進めていきたい。

以 上